

## 母、義兄は大反対 だが、噺家への道へ

その道を極めた人、という意味で用いられる「名人」。言葉の起こりは、織田信長の時代に遡るといふ。初代本因坊算砂の碁をみた信長が、「あなたこそが名人だ！」と発言。その後、江戸時代に入ってから将棋の世界でも使われ、一般に浸透されるようになったといわれる。

さて、噺家の世界でも名人と呼ばれる人物は多いが、なかでも落語中興の祖として敬意を込め、「大圓朝」と呼ばれるのが、江戸時代末期から明治期に一世を風靡した三遊亭圓朝である。

実の名を出淵次郎吉。父親は橋屋圓太郎という二代目三遊亭圓生の弟子で音曲師だった。父の勧めで圓朝が初めて高座にのぼったのは七歳の時。だが、芸にかこつけて家庭を顧みぬ父親を見ていた母と義兄は、圓朝が芸の道に入ることに大反対。結局、母親の言いつけに従い商家に奉公、その後歌川国芳の弟子になって画工の勉強をしたのち、寺の住職になった義兄に引き取られ、寺で暮らすことになった。

だが、蛙の子は蛙。落語が諦めき

自分にそう言い聞かせていた。

そして、この師匠の嫉妬が自作自演を旨とする独自の圓朝落語の原型を作り、「牡丹燈籠」や「真景累ヶ淵」、さらには「死神」といった名作を生み出す原動力となった。つまり、圓朝にとって師匠の嫉妬こそが、その後の人生を大きく変える出来事、一大事だったのだ。

## 山岡鉄舟の従って 「無舌」に励む

円熟期を迎えた圓朝には、陸奥宗光や渋沢栄一といった眞層も多く、その縁で知り合ったのが、「江戸無血開城」の立役者として名を馳せた山岡鉄舟だった。山岡は無刀流の使い手にして、禅と書の達人だった。

山岡が圓朝にこう言った。「あなたは噺家らしいが、昔、母から聞いた、桃太郎の話をしてくれんか？」

「……」

山岡からの急な申し出にキョトンとして言葉が失う圓朝。

「なんで俺が桃太郎のような昔話をしなきゃならねんだ。俺を馬鹿にしてんのか？ それとも公案か？」

公案とは禅の修行者に師匠が



月岡芳年画「はたむとうろう」

れない圓朝は、本堂で本尊を相手に懸命に落語の稽古に励む。そんな姿を見た義兄は、「何事においても稽古は大事。だが、一心に努めなければその先の上達はしない。心を統一するためにも、坐禅を組みなさい！」と坐禅修行を勧め、圓朝もまたその言葉に従い、修行に没頭したという。

そして、「俺の生きる道は落語家以外にはない」と腹を決め、初代圓生の墓前で三遊亭再興の誓いを立て、圓朝は、落語家としての道を邁進することになる。

## 墓が語る

# 一大事

普門山全生庵

## 三遊亭圓朝

『牡丹燈籠』『真景累ヶ淵』、共に三遊亭圓朝創作の怪談噺だ。圓朝落語は、時に歌舞伎となり、「牡丹燈籠」は映画となった。圓朝の噺は神韻縹渺たる名人の話芸に昇華し、後に続く噺家の越すに越されぬ牆壁として浩歎させた。圓朝が高座で一声を発するや、客はものは弟子たちは講筵に列するかの如く耳目をそば立てた。圓朝作の落語は「古典落語」の代表とされたが、あまりにも偉大であったため、未だ「圓朝」を襲名する噺家はいない。



山岡鉄舟が建立した全生庵。

しかし、圓朝は動じなかった。それ对自己対する叱咤激励だととらえた。「口惜しかったら、俺の知らない噺を掛けてみる！」師匠の噺を聞きながら、圓朝は

## 師匠圓生が 嫉妬のあまり嫌がらせ

弛まぬ努力が実を結び、十七歳で真打ちに昇進。だが、なかなか大きな寄席に出ることはできなかった。そこで、圓朝はそれまで掛けていた素噺をやめ、新しい趣向とし



て書き割りや鳴り物を用意、芝居の世話狂言を模した芝居噺（鳴り物噺ともいう）を始めた。因らずも、ここで画工としての勉強が役立つことになるのだから、人生はわからない。歳月が流れ、元治元年（1864）、ついに大きな寄席からお呼びがかかった。両国垢離場の「昼席」だった。喜び勇んだ圓朝は、すぐに師である二代目圓生に報告、「仲入り」前の高座に出てほしい、と願っていた。「仲入り」とは休憩時間のこと。通常、寄席では仲入り前に掛けられるのはトりに次ぐネタというのが通例だ。

ところが、あろうことか圓生は毎晩、圓朝が演ずる予定だった演目を出るのという、掟破りの仕打ちに出るのである。ライオンはかわい子供を谷底に突き落とすという。だが、この時の圓生は単に弟子に対する嫉妬心に他ならなかった。

悟りを得るため与える無理難題のこと。結局、圓朝は桃太郎の話をしらずに帰路に就いた。

だが、どうしたわけか頭から「桃太郎」が離れない。そこで自分で手を入れた「桃太郎」を高座で演じると、これが大好評。後日、山岡に面会した圓朝は「この前できなかった桃太郎の噺、ぜひ聞いてくだセエ！」と申し出る。だが、山岡は一言。「もういいですよ。あの時は母親が

カランコマン……

おお、待ち兼ねたぞ！

新三郎さまあ

お露どのー！

いけねえ  
新三郎さん、  
そいつは幽霊だぞ！！



さんゆうていえんちよう ●天保10年（1838）4月1日（5月13日）～明治33年（1900）8月11日。湯島にて初代橋家圓太郎（初代圓橋）の息として誕生。弘化2年（1845）橋屋小圓太の名で江戸橋の寄席「土手倉」で初高座。その後、二代目三遊亭圓生に弟子入り。嘉永4年（1851）歌川国芳の内弟子ともなる。安政2年（1855）圓朝の名で真打。安政5年（1858）鳴り物道具仕立て芝居噺で旗揚げ。明治5年（1872）芝居噺から素噺に戻り、高橋泥舟の紹介で、義弟の山岡鉄舟の知遇を得、やがて道号「無舌居士」を授かる。井上馨や益田孝（純翁）ら政財界の眞層客も多い。明治22年（1889）向島木母寺に三遊塚を建立し、初代・二代目三遊亭圓生を追善。明治33年（1900）8月11日死去。享年62。

「先生、どうか、あつしを弟子にしてやっておくんなさい。どうすれば舌を使わない噺ができるようになるんでやんしょうか？」

すると山岡は一言「無」と答えた。以来二年、圓朝は坐禅を組み己の舌を無くす修行に取り組んだ。する

と、どこからか聞こえてきたのがこんな言葉だった。「舌で語るからいけない。心の奥の奥の芯で語らねば、本当の噺にはならない」

いよいよその成果を山岡に披露する日。噺はもちろん「桃太郎」だ。目を閉じ心の目でじつと圓朝を見つめていた山岡は、噺が終わるとにっこりとほほ笑んで一言。「圓朝さん、今日の噺はいいね。実にいい。真がある」

そして、筆を取り「無舌居士」と書いて圓朝に与えたという。そんな圓朝は、山岡の菩提寺である上野「全生庵」で仲良く眠っている。山岡は晩年、禅修行の道場としてこの寺を建てた。圓朝の墓銘には、山岡の筆で記された「三遊亭圓朝無舌居士」という字が並んでいる。

十七歳の時に初代圓生の墓前で誓った三遊派の再興を成し遂げた圓朝。だが、その天賦の才のため、圓朝の名を継ぐにふさわしい弟子をつくることはできなかった。

辞世の句は「耳しひ（聾）て聞きさだめけり露の音」。耳が聞こえなくなつて初めて聞こえてくる音がある、まさに「芸禅一如」の境涯に達した人物だった。